



インド映画に惹き寄せられて

永治 日出雄

(1)

ボンベイ（ムンバイ）のタクシーは旅行者にとって低廉で簡便な乗物と言えるが、酷暑の市街でも客席の窓を閉めたままでおく。大通りで信号待ちをする毎に、乳飲み子を抱えた女や十歳位の子どもが自動車の波を潜って近づき、乗客の顔先に物乞いの手を差し出すからである。ミラ・ナイール監督の佳作『サラーム・ボンベイ』では、農村出のストリート・チャイルドが飲茶の出前に精出していたが、インドで頻繁に出会ったのは、家族や親方に指図されて街角で乞食を勤める無数の青少年少女であった。

1998年春のインドは独立50周年を慶賀する一方、ヒンズー至上主義を掲げる人民党の政権獲得とタール砂漠における数次の核実験によって世界の注視を浴びていた。しかし、初めて訪れた私の目的は、東洋で最初にシネマトグラフが披露されたボンベイ、ハリウッドに比肩する映画王国が築かれたボンベイを自分の眼で確かめることにあった。インド映画史に関する専門的な文献は、松岡環さんによる若干の著述とパリ＝ボンピドゥ・センター編集の通史『インド映画』しか日本では読めなかった。しかし、ボンベイで出版された豪華本『かくも多くのシネマ——インドにおける映画』（B・D・ガルダ著）、および詳細な沿革史『ボンベイ——内なる諸都市』（S・ドヴィヴェディとR・メフロトラの共著）を当地で入手し、これら英文の大著からインド映

画史の起点、ワトソンズ・ホテルについてかなり詳しい情報が得られた。

比較文化の観点で初期の世界映画史を辿りつつある私は、どの国でもシネマトグラフ初公開の会場が、きわめて由緒ある中心地や盛り場に存したことを興味深く思う。ニューヨークのブロードウェイ、ウィーンのケルトナー通り、大阪の戎橋＝道頓堀、メキシコシティのマデロ街、イスタンブールのイクスチラル通り、等々。『工場の出口』や『列車の到着』が披露されたワトソンズ・ホテルは、ボンベイ市フォート地区の城砦遊歩道跡、M・ガンジー通りとA・S・ドメロー通りの交差点角に発見できた。イギリス人実業家ジョン・ワトソンの建造による鉄筋5階建ての堂宇はいまも周囲を押し、老朽化した俵容が130年にわたる星霜と風塵を彷彿とさせる。かつてこの界隈は東西交易とインド近代化の中軸をなし、現在もボンベイ大学学舎やプリンス・オブ・ウェルズ博物館など典雅なヨーロッパ建築が聳え立つ。

旧ワトソンズ・ホテルの施設がいまは数多くの店舗、事務所、住宅として使用され、通行人や物売りが行き交う正面柱廊を仰ぐと、真新しい史蹟プレートが掲げられていた。

Lumière Brothers' "Cinématographe" was
First Screened here on 7th of July, 1896, at
the erstwhile Watson's Hotel, thus sowing
the seed of the most popular of the art forms
of this century, cinema, in India.

ボンベイには1930年代創業の映画館がいくつか都心のフォート地区に現存し、エロス・シネマではアメリカ映画『ジャックル』を見たあと、アール・デコ様式の優雅な室内装飾

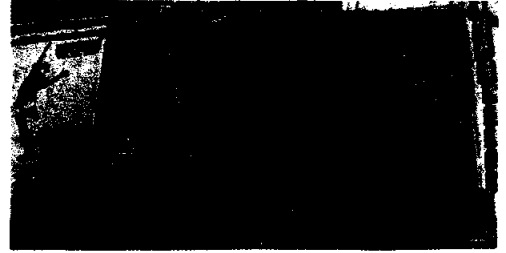
や螺旋状階段に感嘆した。おなじく伝統に輝くリーガル・シネマはインド門近くに位置し、『タイタニック』への人気沸騰で次週の切符まで売り尽くしていた。

インド製作の作品は大抵ダウタウンや学生街の映画館で上映される。ISHQの封切館へ赴いたときも、満席のためその日は入れず、向側の簡素なカフェから劇場正面の人出と看板を眺めた。インド人のアイデンティティを主題とし、31週ロングランを続ける秀作 *Pardes* を、マリン・ドライブ周辺のリパティ・シネマで視聴できたのは幸運と言うべきであろう。今回の旅行ではむしろデリー滞在の際に、コンノート広場界隈で多くのインド映画を観ることができた。人気俳優シャー・ルク・カーンとマドゥリー・ディクシットが共演し、フィルム・フェア最優秀作品賞に輝く *Dil To Padal Hai* もそのなかに含まれる。

(2)

大衆的なインド映画の魅力を知ったのは、1995年にチュニジアへ旅した際である。首都チュニスで滞在したホテルは旧市街スークへの並木道に面し、周辺には映画館が5つほど集中していた。それらの看板には最新の相異なるインド映画が描かれ、夕方になると私も窓口の長蛇の列に加わった。こうして知りえた数本の長編フィルムは、流麗な音楽と舞踊、躍動的な映像や描写で観客を魅了し、筋立てもドラマ、ロマンス、アクション、社会問題、政治闘争など種々の要素を複合させたものであった。それまでもサタジット・レイ監督等の芸術映画を見てはいたが、インド製作のミュージカル映画が東南アジアから北アフリカにかけて広範な人気を博している事実を、初めて私は実感したのである。

社会と時代の推移、学生の気質や関心の変容、情報文化と視聴覚産業の発展に促されて、10年来私は多くの映画をみずから抜粋し、人文系の教養科目や専門科目で授業内容の一環として視聴させてきた。一般に学生の



映画歴はきわめて乏しく、ほとんどがアメリカ映画、それもアニメ、SF、アクションに限られる。授業で扱う作品は年間100本を超えるが、欧米の劇映画とともにアジアや中南米で製作されたフィルムも私は大切にしている。

1997年夏ナールによる華麗な歴史絵巻『カーマ・スートラ』が世界的にヒットし、日本でもインドの大衆的な映画が僅かながら公開されるに至った。旅先からは相当数の市販ビデオを持ち帰ったものの、私の学生も日本語字幕のないインド映画を忍耐強くみるまでには至らない。しかし、最近ではテレビ番組やレンタル・ビデオとしてインドのミュージカル映画が若干提供されるようになった。

こうしてインド映画を大学の授業に組み入れる条件が成立した。受講した学生のなかで、企業まわりりを目前に控えた3年生からは、職を求める若者と企業の非情さを描いた『ラジュウ出世する』にとりわけ共感が寄せられた。また、苛酷なキャスト制度を描破し、若い世代への希望を歌う『インディアラ』には、入学後間もない1年生もつぎのような感想を綴ってくれた。「男女の華やかな踊りや自然の雄大な眺めがとても楽しかった」「インドに映画があるとは思わなかった。これほど素晴らしい作品を見ると、日本の映画製作は負けていると言いたい」「映画は娯楽だと思っていたが、社会の矛盾や人間に生き方を考えさせるものだと判った」「キャスト制度に縛られるおとなを押し切って、子どもたちが罹災者を救出するフィナーレでは、自然に涙が出てきた。」

(愛知教育大学・国際文化)